ティーチャーズ・ライブラリーで

ティーチャーズ・ライブラリー 編集委員会・藤村裕一委員長からのアドバイス

Society5.0に対応した「学校Ver.3.0」の実現を強力にバックアップ

新学習指導要領の目標に対応して

NHKティーチャーズ・ライブラリーは、NHKの優れた一般番組を先生方が授業等でお使いいただけるようにDVDで貸し出すサービスです。

2020年度は、新学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」への転換、知識重視から能力重視への転換、問題発見・解決能力等の学びの基盤となる力の育成を実現する必要があります。今後は、変化の激しい社会にも対応できる人材を育成する教育（学校ver2.0）から、人間ならではの強みを生かし想定外にも対応できる「学校ver3.0」の実現をも指向します。

ティーチャーズ・ライブラリーを「主体的・対話的で深い学び」で活用するために

主体的・対話的で深い学びの基本理念

すべての授業は、図のとおり4つのタイプに分類することができます。その中で主体的・対話的で深い学びは、児童生徒が主体的に学ぶ場面のある、以下の2つの授業類型です。

❸ 児童生徒主体の課題解決学習
❹ 問題解決学習

新学習指導要領は、「問題発見・解決能力」（問題発見能力と問題解決能力）をすべての学びの基盤となる力として掲げています。つまり、従来多く見られた、教師がめあてとして「○○しよう」などと示し、問題意識も生まれていないのに、教師主導で授業を始めることは好ましくないことを示しています。問題発見能力と問題解決能力の両者が育ち、社会がどんなに激しく変化しても主体的に生きてゆける児童生徒を育てることができるのは、❹の問題解決学習のみとなります。その際ティーチャーズ・ライブラリーの番組は、映像によって児童生徒の興味・関心を高め、問題発見につながる優れた教材です。

しかし、児童生徒が追究したい問題をそのまま追究させるだけでは、戦後の「這い回る経験主義」の失敗で明らかなように、学びが深まらず、学習目標に到達しません。児童生徒が本時の学習目標に必然的に到達する鋭い問い（学習問題）を発見するには、教師の深い教材研究とともに、その学習問題を「児童生徒自らが発見した」と思えるように導入場面を設計する教師の高い授業力も必要です。

「主体的な学習」が必然的に「深い学び」となるように開発されたのが、「対話的な学び」を取り入れた改良型の「問題解決学習」です。ティーチャーズ・ライブラリーの番組等の資料や活動をとおして児童生徒が自ら問題を発見し、多様な見方・考え方をできるだけ多く出し合って、予想・仮説を立て、それに合った方法で追究し、その結果を練り合うことで、「ああこういうこともあるのか！」と見方・考え方が広がったり、「これはこういうことだったんだ！」と深まったりする複線型の学習は、学校ver.3.0が目指す、一人一人の個性・人間ならではの強みを生かしたアダプティブ・ラーニングの一つでもあります。

ティーチャーズ・ライブラリーでは、このような教材研究と授業デザインを編集委員があらかじめ行い、利用する皆さんが自校の児童生徒に合わせて若干アレンジするだけで、授業の最終形である❹の「問題解決学習」ができます。

■ 授業の類型（全ての授業が、以下の4つのタイプに分類される）

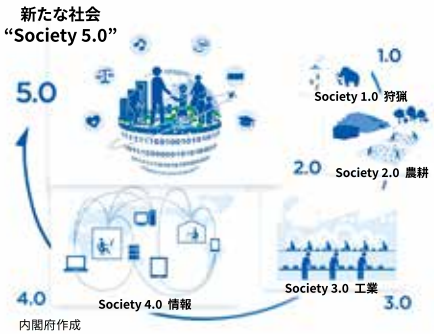
授業のタイプごとに、獲得する学力が違う。1単位時間だけでなく単元レベルでも

	教育学的授業類型	獲得するもの	3類型
鍛える授業	❶教師主導の講義・実習・習熟型授業	基礎的・基本的な知識・技能	習得型
鍛える授業	❷教師主導の課題解決学習（学習課題・追究方法とも教師が）教師主導 Project Based Learning,ジグソー学習	知識・技能の基本的活用モデル	活用型 探究型が可能になるまでの過渡的なもの。学び方を習得済の中・高では時間効率化のために採用
自ら学ぶ授業	❸児童生徒主体の課題解決学習（学習課題は教師が）（追究方法は児童生徒が）	問題解決能力（読解力、思考力、判断力、表現力、価値観 等）	活用型 探究型が可能になるまでの過渡的なもの。学び方を習得済の中・高では時間効率化のために採用
自ら学ぶ授業	❹問題解決学習（学習問題、追究方法とも児童生徒が）Problem Solving Learning,児童生徒主体のPBL	問題発見能力 問題解決能力	探求型（最終形）

T・Cの言語比率でチェックを！（Tの発話＜Cの発話が絶対条件）

藤村（2006）

「主体的・対話的で深い学び」を！



内閣府作成

社会	Society 3.0（工業社会）	Society 4.0（情報社会）	Society 5.0（超スマート社会）
学校	学校 ver.1.0	学校 ver.2.0	学校 ver.3.0
教育方法	教師主導の教え込み 知識重視	主体的・対話的で深い学び 能力重視	主体的・対話的で深い学び＋アダプティブ・ラーニング 人間存在としての基本的価値重視

「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）を支援する番組と、学校ver.3.0対応指導案

1.「主体的な学び」を支援する、問題意識や知的好奇心を高め、子供たちを突き動かす番組

2.「対話的な学び」「深い学び」を支援する、異なる考えを引き出し、練り合う必然性を生む番組

3. フローチャート型指導案による学校ver.3.0（主体的・対話的で深い学び＋アダプティブ・ラーニング＝個の違いに対応した学び）対応「学習展開例」

「主体的・対話的で深い学び」の授業デザイン

「問題解決学習」は、基本的に右図のような学習過程をたどります。その場面ごとの注意すべき点、授業改善のポイントを示します。

導入：問題発見場面

授業冒頭に、以下の「問題発見の４つの方法」で学習問題を発見する場を位置づけてください。

①既有経験や既習との「ズレ」

これまでの経験や学習では説明できない事象と出合う場を設定し、追究せずにはいられない強い問題意識を生みます。

②友達との意見の対立・拮抗

児童生徒の異なる意見を採り上げ、違いを際立たせることによって、どちらが正しいのかという問題意識を生みます。

③目的達成へ向けての障害克服

児童生徒が目的に向かって活動する際、どうしたらその障害を乗り越えることができるのかという問題意識を生みます。

④素朴な疑問からの問題意識の醸成

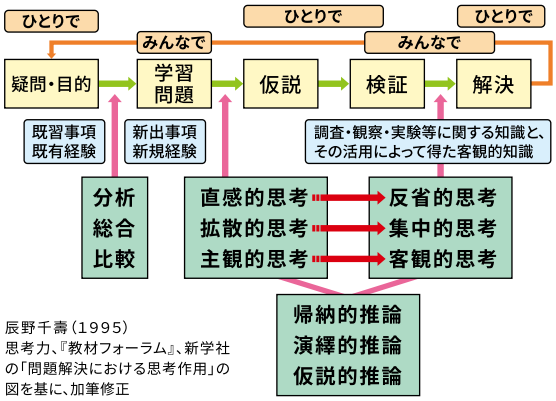
「これはどうなっているんだろう？」などの素朴な疑問から、何のどこが分かっていないかを明らかにし、強い問題意識を醸成します。

展開：個別の予想・追究場面

学習問題ができた後、他者と交流せずに一人で予想・仮説を考える場を設定します。その際、できるだけたくさんの考えや解き方の案などを出し、練り合い、深め合う必然性が生まれるようにします。

自分なりの追究が終わったら、グループや学級全体で交流し、見方や考え方が広がったり深まったりするようにします。グループで交流したことを学級全体でさらに練り合う際には、グループで一つの考えにまとめるのではなく、どのような意見が出たかを紹介するようにして、せっかく出た多様な見方・考え方が失われないようにします。

■ 問題発見・問題解決のために指導すべき思考と活用場面



辰野千壽（1995）
思考力、『教材フォーラム』、新学社の「問題解決における思考作用」の図を基に、加筆修正

終末：学級全体での問題解決場面

学級全体で学習問題の解決を図る際には、各教科等特有の見方・考え方（価値観）を基に、どれが最も優れた答えかを考えたり、学習問題に対応した答えになっているかをチェックしたりするようにします。

また、優秀な児童生徒の意見が一つ出て、それで学習問題が解決したとするのではなく、みんなで学習問題の解決（答え）がそれでよいかどうかを吟味した後、必ずもう一度一人一人に立ち返って、本時の学びでどのように自分の見方・考え方が深まったのか、応用問題や発展問題、学習の振り返りなどによって、一人一人の中に学びが確実に定着するようにします。

［参考］もっと深く学びたい方は、拙著『アクティブ・ラーニング対応 わかる！書ける！授業改善のための学習指導案』参照のこと（ISBN-13: 978-4906768288）